

人をないがしろにしない、保育という思想

菊地知子

「廊下で」に初めて出会ったのは、大学一年時の授業でのこと。それは文字としてよりも、読んでくれた恩師の声で、私の中に残っている。そしてそこに描かれている「何にもしない。何にも言わない」子どもたちの姿に共感し、そういう子どもたちのそばに、子どもたちの仲間として、いられる者でありたいと、願い続けていま、ここに立っている。

大人の成長

私にとって「廊下で」は、保育者と子どもの物語であるよりも、大人にこそ突き付けられる、何を大

事に思つて、どう生きるかを考えるためのテクストの一つである。実直を通り越し、純朴や朴訥であることを通り越し、愚直で時に愚鈍でさえあるような人の姿の中にこそ、私は「真の大人らしさ」を見ようとする。そして自分自身も少しでもその域に近づくことが、人間としての、こと後半生の、成長の名に値する発達ではないかと感じるのである。逆説的に響くかもしれないが、真の大人として思い描きうる姿は、子ども以上に子どもの的である。妥協や打算、とりわけ対他者的に、恣意とか作為をどこかでそぎ落として在る、そんな姿である。その故もあり、

「廊下で」中の、「何にもしない。何にも言わない」で、泣いている子のその生を自らも生きてしまいう子どもたちの姿には、憧れにも似た尊敬の念を起こさせられる。これはもしかすると私一人に限ることではなく、この文章に触れたものであるならば、倉橋が言うところの「うれしい先生」でありたい、との思いを、おそらく強くするであろうし、そうであろうとしているという自負も、もたなくはないだろう。

このような指向性は取りも直さず、何にどのような役立つかを自らに問うことや技能や能力を高めることよりも、「ただその人として在る」ことを大事に思うような、実は意外に守旧的に教養主義的でありうる保育の思想を支えるかもしれない、とも思う。

しかし待てよ、と一方で思う。涙を拭いてやり、泣いてはいけないといい、なぜ泣くのと尋ね、弱虫ねえ、と言う、そのこと、あるいはその人にも、さもあるうとの親愛の情と尊敬を、私は感じる。誰よりもその子を知っている、誰よりもその子を守って

いる、というそのまっすぐな自信は、まぶしい。実際、倉橋はそのような保育者を「有り難い先生」と称している。その場その時の保育を、すべての人間を代表して担ってくれている「有り難い先生」には現実としてなろうにもなり難く、あまつさえ批判しいい謂われは誰にもどこにもない。文字通りただただ有り難い。子どもに、立ち直れないような嫌な思い、つらい思いをさせようという邪悪な気持ちでないなら、受け止め方とか伝え方は、いまここでこの時の保育を担っている、ということに比すれば、ごくごく小さなことなのではないかと思う。

そうでありつつ、なおも「何にもしない。何にも言わない」で傍らに居る子どもたちに魅かれる思いを問うてみる。彼らは、「痛かろう」「つらかろう」「さびしかろう」挙句は「かわいそうに」などと感じていたのではない。自らが身をもって痛く、つらくさびしいのであり、「かわいそう」などとある種の評価的感想をもったりはしないのである。子ども

と同じ地平を生きることが私たちにはもはや容易ではないが、子どもの心もちに触れて（共感して）、「そうなんだよね」と了解する。その上で、諦めや放置や放棄でなく、その生を生きることができるのは、ただその人であることも了解していかなければならない。その痛みを自らの痛みにすることができればその方がどんなにか楽、と、特に人の親ともなれば思うことも多かろうが、そこはその子が生きなければならぬことを、大人として、保育者として、了解した上で居なければならぬ。床に置いたその子の手を、よもや自分が、あるいは誰かが踏んでいるのであれば、気づいてすぐにどかして詫びるなり、あなたの足が子どもの手を踏んでいる、と気づいてもらうことが必要なことも、まますま生じるかもしれない。何よりもまずその人が生きて在ることを大事にする、ということ、決して蔑ろにしない、ということが、保育の思想なのだ、ここでも思う。「蔑ろ」とは、「無いが代」、すなわち、無いことと

同じにする、無化する、ということだという。保育とは、その子が生きて在るということを、決して無いことにしない、無化しない、すなわち蔑ろにしない、ということに重きを置く営みであるように思う。

共に生きるということ

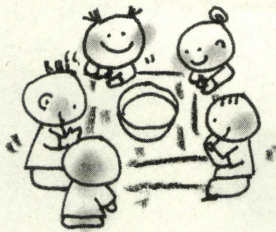
私は長く、私自身の生活の場で、仕事ともプライベートともつかぬ中で人や子どもと出会い、巻き込み巻き込まれて過ごしてきた。幼稚園や保育園といった、子どものためにと心地よく設えられた場への素朴な尊敬の気持ちを失うことはなかったが、子育てや保育をまさしく日常実践として、地のまま素のままやってきたという自負もある。自分の産んだ子どもたちには、温かい寝床と、飢えないだけの食べ物と、身につけて嫌じゃない程度の衣類があれば、後は何とか、それほど不幸ではなく生きていくだろう、という確信めいたものもあった。たまたま私の所に来てくれたその人たちだとしても特別にち

やほやする気も起こらずに、世界中のどの子どもにもそのくらいの「不幸でなさ」が保証されることを願いながら、それでもとかく目の前で生きていてくれる人たちに、せつせとおいしいものを作っては食べさせる、そんなふうになんと共に過ごしてきた。

M男は、そんな生活の中で出会った子どもの一人である。とある伝手で、彼は四歳後半から、小学校入学までの週日は毎日、うちに来ていた。わが家の末っ子のY子よりも一歳半、学年で一つ上だ。やんちゃで明るく、気は優しいけれど譲れないところもきちんとあるM男は、複数の食物アレルギー反応があり、アナフィラキシーで呼吸困難になったことも一度ならずあると聞いた。食べられないものを数えればいろいろあったが、食べられるものの方が断然多く、幸いうちの子どもたちはM男の食べられるものはすべて食べられたので、私はただ、M男が食べられる食材で家人みんなの食事を作ればよかった。うちに遊びにくる子どもたちも、その親たち

も、M男の食については何ら違和感なく心得ていて、M男の身体が受け入れれない小麦も卵も使わずに作ったケーキを誰かが差し入れてくれることなども日常的であった。

ある時、娘のY子の友人F子の家に、M男共どもお邪魔することになった。集まった五人の子どもの中には、F子やT男のように、M男と懇意の子どももいたが、そこでM男と初めて出会うZ子もいた。Z子は、発語はあるけれどまだまだたどたどしく、言葉で伝わらないもどかしさからか友達をたいたり、髪を引っ張ったりしてしまうこともままあった。この日、子どもたちと白玉粉をこね、F子の母と私とでゆでて、さておやつにしよう、というころ、Z子の母が、友人宅へのZ子のお呼ばれがうれしくて初めて焼いたのだ、とクッキー



を持つてやってきた。F子の母は一瞬、M男のアレ
ルギーに気を使ってか受け取るのを躊躇して私を見
たが、私は即座に、「M男は（一人食べなくても）

平気だから」と言った。そのやりとりを知つてか知
らずか、子どもたちで小さなテーブルを囲んでいざ
おやつ、という時にM男が私の所に来て、「M、い
ま、何にも食べたくない」と言った。M男が一番張
り切つて作つた白玉団子のことがちらりと頭をかす
めたが、「うん。そしたらさ、Mは食べないで遊んで
たらいいよ」と応え、私は母親仲間三人とお茶の席
についた。Z子は、おやつに専念する気持ちになれ
ないのか、食べ歩く。母は「Zちゃん、遊ぶのは食べ
てからにしようよ」とたびたび声をかけ、本人の両
肩を抱くようにして席に戻す。戻された何度目かに
Z子は、テーブルの上の磁器の皿で、背後に居たM
男の頭を一撃した。私はそれを目にした瞬間に、不
覚にも涙がドツとあふれ出てしまった。M男にクッ
キーを食べさせられないことや、M男が楽しみなは

ずのおやつを自ら食べないと言つたことを私は心の
どこかでは気にして、あふれる寸前まで、涙が
たまつていたのかもしれない。たたかれたM男の痛
さによりも、涙が出てしまったことに取り乱した。

「Zちゃん、お願い。Mをたたかないで」と、何の
分別も判断もないまま言つた。Z子の母が傷つくか
もしれない、と思つたのは言つてしまつた後だつ
た。当のM男は、座つて遊んだ姿勢のままススッ
とひぎで歩いて椅子に座る私の足元に来た。口を左
右にギユツと開いて目も見開いておどけたような顔
をし、目をしばたたかせていたが、「M、痛かつた
よね。ごめんね、ごめんね」と私が言うや、ほろほろ
と両目から涙をこぼしだした。Z子の母とF子の母
は、優しくZ子を説教（なだめ？）にかかつている。
T男の母は、私の隣の椅子で、なぜか私にもらい泣
きしている。Y子、F子、そしてT男は、誘われる
ようにM男についてきて、三人ヒシとくつついて、
眉間にしわを寄せ泣きそうな顔になっている……。

みんながみんな、大真面目である。私はふっと、この真面目さゆえの諧謔かいぎやく味を感じ、胸の内から今度は笑いがこみ上げてきた。こんなことで、こんなところで涙を流してしまふなんて、私はなんて大人気なくみつともないんだらう。健気に身を寄せる子どもたちに、私は感謝こそすれ、からかう気持ちなんて微塵もない。なのにどうしようもなくおかしい。おかしくていとしくてたまらない。お皿でたた

かれたことと、たたかれたM男にしかその痛みや悔しさが乗り越えられないことは理不尽で気の毒だけども、ほかの子から見れば少しだけ年長のM男が泣いたことも、何だかめでたいことのように思えてくる。Z子と母はこれからも限りなく向き合わなきやならないけれど、「さあどうしようね」と一緒に困り果てたり悲しんだり、時に喜んだりする仲間がいて、つながりがある。何かが解決したわけでも意味を見いだせたわけでもない。ますますごちゃごちゃした中で、他者とただ共にあることを決意のすべて

としつつ生きる姿だけがある。「子どものため」の思いが行き過ぎ一人歩きをすれば、ほしいと願うものを目の前に出してしまふようなおとぎの国にもなるかもしれない。けれど、否、だからこそ、そうするのではなく相変わらずごちゃごちゃで、大概のこととは意味不明のまま生きる生活の中にこそ、他者と共に生きるしかない実感を得る。

つまりは、誰も、誰のことも蔑ろにはしていない。時に寄り添い、時に離れて、気にしたり心配したりし合つて、滑稽なほどである（ちなみに、気にすることも心配も要はSenseである）。

「廊下で」の中に描かれた「何にもしない。何も言わない」、そして、人を蔑ろにすることをしない子どもたちに、恥じるようなことをしてはいないか、仲間と思われるに足る自分自身であるか。恩師の声は、生きる場を変え、時を変えても変わらずに、これからもきつと、語りかけ続けてくれるだろう。

（お茶の水女子大学幼保プロジェクト）